

事態の蓋然性と判断の蓋然性再考

杉村 泰

1. 蓋然性の二類型

本稿は「事態の蓋然性」と「判断の蓋然性」の区別について論じたものである。¹ 両者を区別して考えることにより、蓋然性を表す様々な形式の意味の違いが明らかとなる。² また、これと関連して「認識確定性」と「判断の焦点」についても論じることとする。

従来の蓋然性に関する研究では、「事態の蓋然性」と「判断の蓋然性」が混同されて議論されることが多かった。しかし前者は客体世界と関わる命題表現、後者は話し手の心的態度と関わるモダリティ表現であり、それぞれ別々の概念である。

「事態の蓋然性」：客体世界における事態成立の可能性の度合い

「判断の蓋然性」：話し手の判断の中での事態成立の可能性の度合い

たとえば、同じ蓋然性を表す表現でも、「～可能性ガアル」が客観的な事実(実際にそうなるかどうかは別の話)を述べたものであるのに対し、「～ニチガイナイ」は話し手の頭の中でそう判断したことを述べたものであるという違いがある。

(1) 明日は雨が降る可能性ガアル。

(2) 明日は雨が降るニチガイナイ。

その証拠に、前者は客観的な真偽の対象となるためそれ自体を否定することが

¹ 本稿は杉村(1999)を修正したものである。特に「カモシレナイ」を「カモシレナイ_{M-P}」と分解して考えた点で前稿とは大きく異なっている。

² 「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」については杉村(2001a, 2003)、「キット」と「カナラズ」については杉村(1997)を参照。

杉村 泰

できるが、後者は発話時点における話し手の心的態度を表すためそれ自体を否定することができない。

- (3) 明日は雨が降る可能性ガナイ。
- (4) *明日は雨が降るニチガイナクナイ。

したがって、両者はそれぞれ(5) (6)のように異なる構造を持つと考えられる。

- (5) [[[明日は雨が降る可能性ガアル]]]³
- (6) [[[明日は雨が降る]ニチガイナイ]]

2．主観性判定テスト

次に主観性判定テスト(否定テスト、疑問テスト、連体修飾テスト、過去テスト)によって、以下の表現が「事態の蓋然性」を表すのか「判断の蓋然性」を表すのを見る。主観性判定テストとは、文中のある成分が客観的な真偽の対象となるかどうかを判定するテストである。このテストで適格となるものは「事態の蓋然性」を表し、不適格となるものは「判断の蓋然性」を表すと考えられる。

「80パーセント(である)」、「確率が高イ」、「可能性ガアル」、「(し)ソウダ」、「(よ)うな)気ガスル」、「ト思ウ」、「」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」

2.1 否定テスト

まず各表現が否定の対象になるかどうかを見る。このテストでは「ト思ウ」までが適格で「」以降が不適格となる。

- (7) a. 明日の降水確率は80パーセントデハナイ。
- b. 明日は雨が降る確率ガ高クナイ。
- c. 明日は雨が降る可能性ガナイ。
- d. 明日は雨が降りソウニナイ。

³ これは[[[命題]命題態度のモダリティ]発話態度のモダリティ]の三層構造を表している。

- e. 明日は雨が降るような気ガシナイ。
- f. 明日は雨が降るトハ思ワナイ。
- g. * 明日は雨が降る ナイ。⁴
- h. * 明日は雨が降るカモシレナクナイ。
- i. * 明日は雨が降るニチガイナクナイ。
- j. * 明日は雨が降るヨウデハナイ。
- k. * 明日は雨が降るラシクナイ。
- l. * 明日は雨が降るダロウナイ。

2.2 疑問テスト

次に各表現が疑問の対象になるかどうかを見る。このテストでも「ト思ウ」までが適格で「」以降が不適格となる。

- (8) a. 明日の降水確率は80パーセントですか、90パーセントですか？
- b. 明日は雨が降る確率が高いですか、雨が降る確率が低いですか？
- c. 明日は雨が降る可能性ガありますか、雨が降る可能性ガナイですか？
- d. 明日は雨が降りソウですか、雨が降りソウニナイですか？
- e. 明日は雨が降るような気ガシマスか、雨が降るような気がシマセンか？
- f. 明日は雨が降るト思イマスか、雨が降るトハ思イマセンか？
- g. * 明日は雨が降る ですか、雨が降るカモシレナイですか？
- h. * 明日は雨が降るカモシレナイですか、雨が降る ですか？
- i. * 明日は雨が降るニチガイナイですか、雨が降る ですか？
- j. * 明日は雨が降るヨウですか、雨が降る ですか？
- k. * 明日は雨が降るラシイですか、雨が降る ですか？
- l. * 明日は雨が降るダロウですか、雨が降る ですか？

2.3 連体修飾テスト

次に各表現が連体修飾成分になるかどうかを見る。このテストで特徴的なのは、

⁴ 「明日は雨が降らない」なら適格な文であるが、その場合は「」を否定したことはならない。したがって、「」は極性(肯定・否定)の内側には来ないことが分かる。

杉村 泰

上の二つのテストと違い、「(ような)気ガスル」と「ト思ウ」は連体修飾成分にならず、逆に「カモシレナイ」は連体修飾成分になる点である。

- (9) a. 降水確率が80パーセントノ空模様だ。
b. 雨が降る確率ガ高イ空模様だ。
c. 雨が降る可能性ノアル空模様だ。
d. 雨が降りソウナ空模様だ。
e. * 雨が降るような気ガスル空模様だ。
f. * 雨が降るト思ウ空模様だ。⁵
g. * 雨が降る 空模様だ。
h. 雨が降るカモシレナイ空模様だ。
i. ? 雨が降るニチガイナイ空模様だ。⁶
j. * 雨が降るヨウナ空模様だ。
k. * 雨が降るラシイ空模様だ。
l. ? 雨が降るダロウ空模様だ。

まず「(ような)気ガスル」と「ト思ウ」について考えよう。実は同じ「(ような)気ガスル」や「ト思ウ」でも、(10a) (10b)のように連体修飾成分となるものもある。

- (10) a. 桜の季節には子供に返ったような気ガスルコトがある。
b. 桜の季節には子供に返ったト思ウコトがある。

この場合の「(ような)気ガスル」や「ト思ウ」は、次に示すようにそれ自体が判断の対象となっているため命題であると考えられる。

- (11) a. 桜の季節には子供に返ったような気ガシマスか、気ガシマセンか。
b. 桜の季節には子供に返ったト思ウコトガアリマスか、思ウコトガアリマセンか。

しかし、次のように発話時点における話し手の推量を表す「(ような)気ガスル」

⁵ 受身形の「雨が降るト思ワレル空模様だ」なら適格となる。

⁶ (9i)を適格だと感じる人は、「～ニチガイナイと思われる空模様だ」の「と思われる」の省略表現として読んでいるためであろう。「と思われる」を入れずに読むと不自然である。(9l)も同様である。

や「ト思ウ」は、すでに本動詞ではなくモダリティ形式として機能していると考えられる。このように「(ような)気ガスル」や「ト思ウ」は、命題として機能する場合とモダリティとして機能する場合の二種類が存在する。⁷ 上の(9e) (9f)もモダリティ形式として解釈されるため非文となるのである。

- (12) a. どうも彼の仕業のような気ガスル。
b. たぶん彼の仕業だト思ウ。

さらに、ある表現が文代名詞の対象になるかどうかという「文代名詞化テスト」⁸によって、「ト思ウ」に上の二種類があることを確かめておく。文代名詞の対象になれば命題、ならなければモダリティである。そこで下の例を見ると、「ト思ウ」には (13a)のように文代名詞の対象になるものと、(13b)のように文代名詞の対象にならないものがあることが分かる。これにより、「ト思ウ」には命題として機能するものとモダリティとして機能するものの二種類あることが分かる。

- (13)a. A : 明日は雨が降ると思いますか、雨が降ると思いませんか？
B : 明日は雨が降るト思イマス。
A : それは本当ですか。
(それ = 明日は雨が降るト思ウこと)
b. A : 明日の天気はどうなると思いますか？
B : 明日は雨が降るト思イマス。
A : それは本当ですか。
(それ = 明日は雨が降ること)

次に「カモシレナイ」について考える。一般に「カモシレナイ」はモダリティ表現であるとされている。しかし、「カモシレナイ」は (14)のように連体修飾成分にもなるし、⁹ (15)のように話し手の発話時点における心的態度から外れた一般的事実

⁷ 仁田(1989 : 48)は「ト思ワレル」、「ト思エル」、「ト考エル」、「ト感ジル」、「～気ガスル」、「～気ガシテナライ」、「～感ジガスル」、「～感ガアル」、「～見込ミダ」、「～見通シダ」などについて、「実質形式とモダリティを表す文法形式の中間に位置するような存在であろう。実質形式と文法形式とが連続することのあることを物語っている一例である」としている。

⁸ 文代名詞化テストは澤田(1978)による。

⁹ 三原(1995)にも、「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」の連体修飾節における許容度の違いが指摘されている。ただし、三原は「ニチガイナイ」が言いにくいのは、文法的な理由によるも

杉村 泰

を表す場合にも使われる。

- (14) 私が韓国に渡ったことを知られたら、残酷に殺されるかもしれない危険があったからです。(朝鮮日報『月刊朝鮮』編、夫址榮訳『祖国を棄てた女』)
- (15) 生まれる子供は男か女のどちらかである。男の子カモシレナイし、女の子カモシレナイ。昔から決まっていることである。

また、「カモシレナイ」は文代名詞化テストにおいて文代名詞の対象になる。その点で「ダロウ」とは性質を異にする。

- (16) a. A : 明日の天気はどうでしょうか？
B : 明日は雨が降るカモシレマセン。
A : それは本当ですか。
(それ = 明日は雨が降るカモシレナイこと)
- b. A : 明日の天気はどうでしょうか？
B : 明日は雨が降るデショウ。
A : それは本当ですか。
(それ = 明日は雨が降ること)

これらの文において「カモシレナイ」は「複数の事態の成立可能性がともに存在する」ことを述べている。複数の事態の共存可能性ということ自体は、話し手の存在とは独立した客体世界の出来事である。そこで本稿では「カモシレナイ」を「カモシレナイ_{P- M}」のように命題を表す「カモシレナイ_P」とモダリティを表す「_{- M}」とに分けて考える。このように考えると、終止形の場合は「_{- M}」がモダリティの機能を果たし、連体形の場合は「_{- M}」がつかず命題として機能することが説明可能となる。¹⁰

- (17) あの人はもう来ないカモシレナイ_{P- M}。
- (18) 来ないカモシレナイ_P人を待つ。

のではなく文体的な落ち着きの悪さによるものであるとしている。

¹⁰ 詳しくは杉村(2001a, 2003)を参照。

2.4 過去テスト

次に各表現が過去文の対象になるかどうかを見る。このテストでは「 」と「ダロウ」は形態的にタ形を持たず不適格となり、「ニチガイナイ」は不自然な文となる。以下、一般にモダリティ表現であるとされる「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」の違いについて考える。

- (19) a. その日の降水確率は80パーセントデアッタ。
 b. その日は雨が降る確率が高カッタ。
 c. その日は雨が降る可能性ガアッタ。
 d. その日は雨が降りソウダッタ。
 e. その日は雨が降るような気ガシタ。
 f. その日は雨が降るト思ッタ。
 g. * その日は雨が降る た。
 h. その日は雨が降るカモシレナカッタ。¹¹
 i. ? その日は雨が降るニチガイナカッタ。
 j. その日は雨が降るヨウダッタ。
 k. その日は雨が降るラシカッタ。
 l. * その日は雨が降るダロウタ。

先行研究では「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」は「疑似モダリティ」(仁田1991)あるいは「二次的モダリティ」(益岡1991)などと呼ばれ、タ形をとった場合には過去における判断を表すと説明されている。しかし、これらの形式が本当に過去における判断を表すのかどうか、もう一度考え直してみたい。まず「カモシレナイ」の例から見ていこう。

- (20) 六時三十分に高田馬場駅の改札口で会うことにした。お金は二千元しかなかったので、経理のブロンディのところに行って大急ぎで給料の前借りを頼もうか、と思ったが、机の前にブロンディの姿はなかった。もう帰り仕度のために洗面所に行っているのかもしれなかった。(椎名誠『新

¹¹ 高橋(1985: 212)は、「過去のことに付いて推量するばあいには、「シタダロウ」という、おしはかり形の過去形をつかったり、確率を推定するコピュラとくみあわせて「シタカモシレナイ」「シタニチガイナイ」のような形式をつかったりするものがふつうである」としている。

橋島森口青春篇』)

- (21) 私は台所の椅子に腰を下ろしていった誰が私のごみためのような部屋をかたづけてくれたのか思いをめぐらしてみた。誰かが何かの目的のために手間をかけて隅から隅までかたづけたのだ。それは例の記号士の二人組かもしれないし、あるいは『組織』の人間かもしれないなかった。(村上春樹『世界の終わりとハイドボイルド・ワンダーランド』)
- (22) その日は雨が降るカモシレナカッタ。(=雨が降るかもしれない状況にあった)

先に述べたように「カモシレナイ」は「複数の事態の成立可能性がともに存在すること」を表し、その構造は「カモシレナイ_{P- M}」のように捉えられる。これを基に考えると、「カモシレナカッタ」の構造は「カモシレナカッタ_{P- M}」のように分析される。これは「その日は雨が降った」の「」がテンスの外側に來ると並行した現象である。このように考えると、「カモシレナカッタ」は過去における「判断」ではなく、過去における「事態」を表すことが分かる。

次に「ニチガイナイ」の例を見ていこう。(23)(24)は「ニチガイナイ」がタ形となっている例である。

- (23) 私は、おばさんからこれまで働いた分の給料をもらいたいと思いましたが、ないしょで出ていかなければならなかったので、最後まで黙っていました。おばさんは韓国の話が出るたびに警戒する人だったので、私が行くというと止めるに違いなかったからです。(朝鮮日報『月刊朝鮮』編、夫址榮訳『祖国を棄てた女』)
- (24) わたしが保衛部にいたときの経験からして、北が外国の機関に対してそのような依頼をしてきたときには、すでに北の逮捕網がくまなく張りめぐらされているにちがいなかったからである。(康明道著、尹学準訳『北朝鮮の最高機密』)

しかし、これらの「ニチガイナイ」は「～という状況の成立に間違いなし」(～に+違い+ない)という意味を表しており、命題表現であると考えられる。その証拠にこの「ニチガイナイ」は文代名詞の対象になる。

- (25) A：最後まで黙っていたのは、行くというと止めるニチガイナカッタか

からです。

B：それは本当ですか？

(それ=行くという止めるニチガイナカタから)

(それ 行くという止めるから)

このような「に+違い+ない」が、発話時点における話し手の推量判断を表す場面で使われるようになったものが、モダリティ(推量判断)の「ニチガイナイ」であると考えられる。

モダリティの「ニチガイナイ」はタ形にすると不自然な表現になる。(26)は過去の出来事について述べたものであるが、全体がタ形で書かれているのに、「ニチガイナイ」の部分だけはル形で書かれている。これを「～は畜生以下のゴミに等しい人間ニチガイアリマセンデシタ」とすると、この「ニチガイナイ」は「～はそういう人間に間違いなかった」という意味に変わってしまい、元の話し手の推量判断の意味はなくなってしまう。

(26) その家に住んでいるあいだ『ローヤルファミリー』という韓国の本を読むことができました。

金正日の甥である李韓永が、韓国に渡ってから書いた本でした。本の内容が事実であるならば、金日成・正日父子は畜生以下のゴミに等しい人間に違いありません。

二日間一睡もせずに本を読み通しました。その間、私の体は無重力状態に陥ったかようになり、神経も麻痺してしまいました。時折、思わず悲鳴を上げたりして家の人々が駆けつけたりもしました。(朝鮮日報『月刊朝鮮』編、夫址榮訳『祖国を棄てた女』)

(26)の「ニチガイナイ」は、話し手の視点が物語場面の現在に移動したものと考えれば説明ができる。そのような視点の移動がない場合には、「ニチガイナカタ」を使うのではなく、「ゴミに等しい人間ニチガイナイと思いました」のように引用文の中に入れるのが自然である。

ところで、小説などでは「ニチガイナカタ」や「カモシレナカタ」が物語場面における推量判断を表すことがある。たとえば(27)の「ニチガイナカタ」、「カモシレナカタ」は「ニチガイナイ」、「カモシレナイ」と置き換えることが可能なこ

杉村 泰

とからも分かるように、物語世界のまさにその場面における話し手の推量判断を表している。

- (27) 本多が、なぜ“杉野友子”と名のった久子の、東京での住所を知ったか？前に、室田社長として考えたことを、ここでも佐知子に置かえればよい。彼女は、本多に、久子の行先を示唆したのだ。本多は、事件のすべてが明確に分かった時に、いっさいを禎子に告げるはずであった。だから、彼の東京行きは、禎子に一部分を黙っていたことで、不幸な事態を起こした。もし彼が、それまでに知りえた知識を、全部、禎子に話していたら、禎子はもっと早く、室田夫人に焦点を当てたに違いなかった。そうすれば、あるいは、久子の死だけでも、食い止めえたかも分からなかったのである。(松本清張『ゼロの焦点』)

ここで(27)の意味構造を考えると、(28)のようになっていることに気づく。(28)において「夕」は当該の事態が小説の執筆時点よりも前に起きた出来事であることを表している。

- (28) [もし彼が、それまでに知りえた知識を、全部、禎子に話していたら、禎子はもっと早く、室田夫人に焦点を当てたに違いない。そうすれば、あるいは、久子の死だけでも、食い止めえたかも分からない](という状況が執筆時点以前にあった)た。

このような表現は物語場面において「ニチガイナイ」、「カモシレナイ」と推量する視点と、そういう状況が過去にあったことを執筆時点から眺める視点とが合わさってできた表現である。このように、「ニチガイナイ」や「カモシレナイ」は、夕形になるからといって単純に客体化した表現であるとは結論できないので注意が必要である。¹²

次に「ヨウダ」の例を見ていこう。「ヨウダ」には推量判断を表す用法もあるが、夕形の場合は「～の様子だった」という過去における様態を婉曲的に言う用法とな

¹² これに関して仁田(1999:40)は、「語り物」の中では、有標のモダリティ形式を持った文は、出来事の連なりといった主筋の展開には関わらない。挿入的な語り手の心内発話を表す。語り手の心内発話を表すことになる、この主の文におけるモダリティ形式の非過去・過去の交替には、語り手の視点が関わっているのかもしれない」と述べている。

る。

- (29) 母は憲一が三十六歳まで独身だったということにまだ不安を持っているようだった。(松本清張『ゼロの焦点』)
- (30) 野村浩子という臨床心理士は、すでに森谷千尋の多重人格障害についてかなり詳しくつかんでいるようだったし、人間的にも信頼が置けそうだった。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

推量判断の「ヨウダ」が過去文の中に収まるようにするには、「～(の)ヨウダと思った」や「～(の)ヨウダと分かった」のように引用文の中に入れる必要がある。

最後に「ラシイ」の例を見ていく。「ラシイ」にも推量判断を表す用法があるが、タ形の場合は「～の様子だった」という過去における様態を婉曲的に言う用法となる。

- (31) 禎子は、会社からの今の電話を伝えた。義兄は、それで意外に重大なことになるのを悟ったらしかった。(松本清張『ゼロの焦点』)
- (32) 噂の内容については、浩子が、ぼかした書き方をしているので、かなり推測で補うことを余儀なくされた。だが、要するに、千尋が「呪い」によって三人を殺したというものらしかった。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

推量判断の「ラシイ」が過去文の中に収まるようにするには、「～ラシイと思った」や「～ラシイと分かった」のように引用文の中に入れる必要がある。

- (33) 千尋には、叔父さんと叔母さんの会話の内容がすべて理解できたわけではなかったが、やはり両親が亡くなったらしいということはわかった。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

ただし、次のように過去における推量判断を表していると解釈するのが適当な場合もある。このような例は先の「ニチガイナカタ」と同じように、小説など語り物の中で使われる表現である。(34)は物語場面において「どうやら漁業組合の集会所ラシイ」と推量判断する視点と、そういう状況が過去にあったことを執筆時点から眺める視点とが合わさってできた表現である。

杉村 泰

- (34) トタンぶきの建物は、部落の中の唯一の四つ辻の角にあって、どうやら
漁業組合の集合所らしかった。(安部公房『砂の女』)

2.5 2節のまとめ

以上の分析結果をまとめると表1のようになる。

表1 蓋然性を表す文末形式

蓋然性を表す表現	否定	疑問	連体修飾	過去文	主観性
80パーセントである	+	+	+	+	命題
確率が高い	+	+	+	+	命題
可能性がある	+	+	+	+	命題
シソウダ	+	+	+	+	命題
(ような)気ガスル	+	+	+/-	+	命題/モダ
ト思ウ	+	+	+/-	+	命題/モダ
	-	-	-	-	モダ
カモシレナイ	-	-	+	+	命題/モダ
ニチガイナイ	-	-	?	?	モダ
ヨウダ	-	-	-	+	モダ
ラシイ	-	-	-	+	モダ
ダロウ	-	-	?	-	モダ

注) +は当該の主観性判定テストで可となること、-は不可となること、
?は不自然となること、+/-は両方の場合があることを表す。
「モダ」はモダリティの略である。

3 「キット」と「カナラズ」

「事態の蓋然性」と「判断の蓋然性」の区別は蓋然性を表す副詞にも現れる。一般に「カナラズ」と「キット」は同じ蓋然性を表す副詞としてまとめて議論されること

が多い。たしかに、(35)と(36)を見る限り、「カナラズ」と「キット」は同じように「雨が降る」ことの蓋然性を表すように感じられる。¹³

(35) 明日はカナラズ雨が降るダロウ。

(36) 明日はキット雨が降るダロウ。

しかし、詳細に意味構造を調べると、「カナラズ」は「雨が降る」という事態の確立の高さ(事態の蓋然性)を限定し、「キット」は話し手の推量判断の確信度の高さ(判断の蓋然性)を限定していることが分かる。

(37) 明日は[カナラズ雨が降る]ダロウ。

(38) 明日はキット[雨が降る]ダロウ。

4．認識確定性

次に「認識確定性」について論じる。「認識確定性」は三原(1995)の「判断確定性」を修正した概念である。まず、三原の「判断確定性」の概念から見ていく。

判断確定性の概念は現実世界における事態の生起可能性を捉えようとするものではなく、判断が話者の意識の中でどの程度確定的と捉えられているかを巡る概念である。つまりそれは文の内容に関わる確定性ではない(三原 1995:296)

三原は「判断確定性」の概念を、ムードの表現が連体修飾節に入るかどうかという基準として使った。三原の「判断確定性」に関する表(三原 1995 : 296)を表 2 に示す。この表の左列は、ムードの表現が連体修飾節に入るかどうかを示したものである。

¹³ 詳しくは杉村(1997)を参照。

表2 三原(1995)の「判断確定性」

	ムードの表現	判断確定性
OK	ソウダ(予感・予想)、ヨウダ・ミタイダ(様態)	完全確定
OK	デアロウ、ハズダ	主観的確定
OK	カモシレナイ	確定に近似
OK	ニチガイナイ	直感的確定
??	ラシイ	未確定に近似
*?	ダロウ	未確定
*	ヨウダ・ミタイダ(蓋然性)、ソウダ	完全未確定

ここで注意したいのは、表2の「判断確定性」の欄が不統一な分類となっている点である。「主観的確定」、「直感的確定」、「確定に近似」などというのは、基準が不均一で分かりにくい分類である。このような分類となっているのは、三原が眼前の出来事を描写しただけの「認識」と、推論による話し手の判断の加わった「推量」を区別していないためであると考えられる。しかし、三原の「判断確定性」は、文末のモダリティ形式を整理するのに大変有効な概念である。そこで本稿では、「判断確定性」を「認識」における確定・不確定を表す概念として考えることにする。用語としては、「認識」における確定性であることを強調するために「認識確定性」と呼ぶことにする。

「認識確定性」を説明する前に、まず「事態確定性」¹⁴から説明しておく。「事態確定性」とは客体世界における事態成立の確定・不確定を捉える概念である。ある一つの事態が確実に成立する(あるいは成立しない)場合を「事態確定性が確定」とあり、互いに矛盾対立する複数の事態の成立可能性がともにある場合を「事態確定性が不確定」とあると言う。前者は「ダ/」、後者は「カモシレナイ」で表される。

一方、「認識確定性」とは話し手の「認識」の中での事態成立の確定・不確定を捉える概念である。すなわち、事態の成立が「確定」にせよ「不確定」にせよ、そうした「事態確定性」が発話時点においてどちらかに定まっているのか、定まっていなかったのかという概念である。定まっている場合を「認識確定性が確定」とあり、

¹⁴ 本稿で言う「事態確定性」は、三原(1995)の「事実確定性」に相当する。「事態」と「判断」を対立的に考える本稿の立場に従って用語を改めた。

定まっていない場合を「認識確定性が不確定」とであると言う。ここで注意したいのは、「認識確定性」は文末形式自体に備わったものではなく、文に備わったものであるということである。「認識確定性」が「確定」となるのは推論の関わらない非推量文、「認識確定性」が「不確定」となるのは推論の関わる推量文である。

このように、「認識確定性」を文に備わったものであると考えると、「ダ/」や「カモシレナイ」のように、推量文にも非推量文にも使える表現についての説明が可能となる。すなわち、「ダ/」や「カモシレナイ」自体は常に「事態確定性」のみを表し、「認識確定性」は推量文や非推量文といった文に由来するものであると考えられるのである。一方、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」は基本的に推量文に使われ、それ自体に推量の意味が入るため、「認識確定性」は「不確定」となる。なお、三原は「ソウダ(予感・予想)」、「ヨウダ・ミタイダ(様態)」、「ハズダ」をムードの表現に位置付けているが、これらは「ソウ-ダ」、「ヨウ-ダ」、「ミタイ-ダ」、「ハズ-ダ」と分析されるため、「ダ」に含めて考えればよいと思われる。三原はこれらを「完全確定」、「主観的確定」としているが、それはこれらが非推量文で使われるためであると説明できる。

以上のことを整理すると、表3のようになる。(「ダロウ」については後述)

表3 「事態確定性」と「認識確定性」

文末形式	事態確定性	認識確定性
ダ/	確定	(確定 or 不確定)
カモシレナイ	不確定	
ニチガイナイ		不確定
ヨウダ		不確定
ラシイ		不確定
ダロウ		(確定 or 不確定)

次に「事態確定性」と「認識確定性」の関係について例を挙げて説明する。たとえば、ある男が「スパイ」であるかどうか話題となっているときに、「スパイである可能性」が「確定」であれば(39a)のように言い、「スパイでない可能性」が「確定」であれば(39b)のように言う。また、「スパイである可能性」と「スパイでない可能性」が共に残されている場合には(39c)のように言う。前二つの場合、「事態確定性

が「確定」であると言い、後者の場合、「事態確定性が不確定」であると言う。このように(39a)(39b)と(39c)とでは「事態確定性」に違いが見られる。しかし、これらの表現は男がスパイである可能性が「ある」のか「ない」のか「両方」なのかということに関しては、発話時点ですでに一つの「認識」に達している。これを「認識確定性が確定」であると言う。¹⁵

- (39) a. ねえ、知ってる？あの男はスパイダよ。
b. ねえ、知ってる？あの男はスパイジャナイよ。
c. ねえ、知ってる？あの男はスパイカモシレナイよ。

一方、「ダ/」や「カモシレナイ」は、(40)のように未知推量を行なう文脈で使われることもある。この場合、発話時点において話し手は、男がスパイである可能性が「ある」のか「ない」のか「両方」なのかを「認識」していない。これを「認識確定性が不確定」であると言う。

- (40) a. 思うに、あの男はスパイダ。
b. 思うに、あの男はスパイジャナイ。
c. 思うに、あの男はスパイカモシレナイ。

(39) (40)からも明らかなように、「認識確定性」が「確定」なのか「不確定」なのかということは、「ダ/」や「カモシレナイ」自体に備わった性質ではなく、推量文、非推量文といった文に備わったものであると考えられる。

一方、話し手は事態成立の確定・不確定が不明な場合、「わからない」と言うこ

¹⁵ この点に関して、森山(1989)は、「かもしれない」と判断されるということ自体は、話し手において確定的な情報である。それゆえ、情報は話し手のものである。ただ、話し手の情報でありながら、そこで述べられる命題情報が、事実とは判断されていないというに過ぎない。その意味で、不確定と区別して、不確定ということが適当である。それで、蓋然性判断の形式を伴う文の意味は、話し手において不確実な内容を、文の意味としては確定的に述べる意味だとも言える(森山1989: 79)としている。森山はこの性質を狭義蓋然性判断の諸形式(カモシレナイ、ニチガイナイ、ヨウダ、ミタイダ、ラシイ、ソウダ、ハズダ)すべてに当てはまるとしている。

一方、大鹿(1992)は、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」に对象的な意味と作用的意味の二つがあることを認め、「カモシレナイ」は对象的意味が「可能性」、作用的意味が「可能性認識」であり、「ニチガイナイ」は对象的意味が「確実性」、作用的意味が「確実性認識」であるとしている。

ともあるが、推論によって何らかの帰結を導くこともある。(41)の「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」はそのような話し手の推量を表す表現である。これらの形式は基本的に推量文に使われ、それ自体が推量を表すため、「認識確定性は不確定」となる。

- (41) a. 思うに、あの男はスパイニチガイナイ。
 b. 思うに、あの男はスパイノヨウダ。
 c. 思うに、あの男はスパイラシイ。

残る「ダロウ」は推量表現であるとされることが多い。たしかに、(42a)のように推量を表す文脈に使われる場合もある。しかし、(42b) (42c)のように非推量表現も可能であるため、それ自体が推量判断を表すわけではないと考えられる。¹⁶

- (42) a. 思うに、あの男はスパイダロウ。
 b. 私って奇麗デショウ?
 c. ニンジンを買うデショウ、玉ネギを買うデショウ、あと何だっけ?

「ダロウ」の特徴は「ダ/」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」に後続する一方、「ヨウダ」、「ラシイ」には後続しない点にある。

- (43) a. あの男はスパイ-ダロウ。
 b. あの男はスパイカモシレナイ-ダロウ。
 c. あの男はスパイニチガイナイ-ダロウ。
 d. * あの男はスパイノヨウ-ダロウ。
 e. * あの男はスパイラシイ-ダロウ。

¹⁶ 「ダロウ」に関する研究は多いが、その機能はいまだ明確にはなっていない。宮崎(1991: 38)は「推量」のダロウの不確かさは、判断の成立についての不確かさではなく、認識のあり方における不確かさであると考えられる」とし、森山(1992: 73)は「ダロウは、結論にまだ至っていない - 判断を形成する過程にあること - を表示する」としている。大鹿(1992: 129)は「いうまでもないことだが、そこでは真偽の判断が行われているわけではない。むしろ推量はある事態を思い描く作用であると言ってもよい」とし、大鹿(1993: 103)は「「……だろう」という文は事実を推量しており、従って「……」の部分は事実として想定された事態である」と述べ、「ダロウ」は確実なこととして承認する断定と対立し、不確実なこととして承認するとしている。三宅(1995: 2)は「「推量」：話し手の想像の中で命題を真であると認識する」としている。

「ニチガイナイ」は思い込みによる推量を表し、「ヨウダ」、「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠に基づく推量を表す。「ダロウ」が「ヨウダ」、「ラシイ」につかないということは、これが根拠に基づく推量には使えないことを示している。一方、「あの男はスパイダロウ」、「あの男はスパイカモシレナイダロウ」という表現は、証拠不足のため事態の確実・不確実が確認できないことを表している。「ダロウ」は証拠不足のため当該の認識や推量が確認できないことを表す表現であると考えられる。¹⁷

5. 判断の焦点

次に判断の焦点について論じる。田窪(1987: 43)は、「日本語では、原則的に文末の述語以外が自然な質問文の焦点に来ることができない。そこで「の」をつけて、焦点に来る要素を文末述語内に入れる必要がある」と指摘している。次の文で「彼がいるから」や「英語をマスターするために」という理由節が質問文の焦点に入るためには、「の」のスコープに入れなければならない。

- (44) a.?? 彼がいるから、北海道大学に行きますか。(田窪1987)
b. 彼がいるから、北海道大学に行くんですか。(田窪1987)
(45) a.?? 英語をマスターするために、アメリカに行きますか。(田窪1987)
b. 英語をマスターするために、アメリカに行くんですか。(田窪1987)

続いて田窪は、同様の現象がモーダルのスコープに関しても起こることを指摘している。(46a)の「彼が行ったから」は「彼女が行ったコト」の理由にはならない。「から」節が「彼女が行ったコト」の理由を表すには、(46b)のように「の」のスコープに入れなければならない。

- (46) a. 彼が行ったから[彼女も行った]でしょう。¹⁸ (田窪1987)

¹⁷ (42c)は次の表現の婉曲用法であると考えられる。次の表現がニンジンや玉ネギを買うことをはっきり認識しているのに対し、(42c)はあえて確認を避けた表現を使うことによって、ニンジンや玉ネギを買うことを今現在認識している最中であるというニュアンスにしている。

(i) ニンジンを買う、玉ネギを買う、あと何だっけ？

¹⁸ この文について田窪(1987: 43)は、「すなわち、「から」は、「彼女が行った」理由でなく、話

- b. [彼が行ったから、彼女も行っただけ]のしょう。(田窪1987)

そこで、これを受けて次の各文の文末形式が理由節をそのスコープに入れる場合に、「の」が必要であるかどうかを確かめることにする。まず、主節の「十万円札を発行する」を焦点とする場合は、田窪の指摘通り「の」が不要である。

- (47) (政府は景気回復を促すために、何をするのかという文脈で)
- a. 景気回復を促すために、十万円札を発行するカモシレナイ。
 - b. 景気回復を促すために、十万円札を発行するニチガイナイ。
 - c. 景気回復を促すために、十万円札を発行するヨウダ。
 - d. 景気回復を促すために、十万円札を発行するラシイ。
 - e. 景気回復を促すために、十万円札を発行するダロウ。

一方、理由節を焦点とする場合、「カモシレナイ」と「ダロウ」は「の」が必要である。しかし、「ニチガイナイ」と「ラシイ」は「の」があってもなくてもよく、「ヨウダ」は「の」があると非文になる。¹⁹

- (48) (なぜ政府が十万円札を発行するのかという文脈で)
- a. * [景気回復を促すために十万円札を発行する] カモシレナイ。
 - b. [景気回復を促すために十万円札を発行する] ニチガイナイ。
 - c. [景気回復を促すために十万円札を発行する] ヨウダ。
 - d. [景気回復を促すために十万円札を発行する] ラシイ。
 - e. * [景気回復を促すために十万円札を発行する] ダロウ。
- (49) (なぜ政府が十万円札を発行するのかという文脈で)
- a. [景気回復を促すために十万円札を発行する] の カモシレナイ。
 - b. [景気回復を促すために十万円札を発行する] の ニチガイナイ。
 - c. * [景気回復を促すために十万円札を発行する] の ヨウダ。
 - d. [景気回復を促すために十万円札を発行する] の ラシイ。

者がそう推測する理由を述べている」と説明している。

¹⁹ 安達(1997: 4)は「証拠性判断の諸形式(引用者注: ヨウダ, ラシイ, ミタイダ, シソウダ)は形式の内部に「の(だ)」の介在を許さないという特徴を共有する」とし、「これは、本稿の立場からは、「の(だ)」の介在によって得られる効果と証拠性判断の形式の意味とが重なり合っていることを示唆していると考えられる」と説明している。しかし、「ラシイ」の場合には「の(だ)」の介在が許されると思われる。

- e. [景気回復を促すために十万円札を発行する]のダロウ。

すでに説明したように、「ダ/ 」と「カモシレナイ」は事実確定性の確実・不確実で対立し、「ダ/ 」と「ダロウ」は事態の成立を確証的なものと捉えるか捉えないかという点で対立している。これと並行して考えると、「ノダ」を使う場面で、事実確定性が確実であれば「ノダ」、不確実であれば「ノカモシレナイ」、一応確実と捉えるが確証できないことを示す場合は「ノダロウ」が使われると説明することができる。要するに、「ノカモシレナイ」と「ノダロウ」は「ノダ」の成立可能性と並行的に考えればよいのである。一方、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」は、「ノダ」の力を使わずに理由節を焦点にする機能が備わっている。この点で両者は性質が異なっている。

このような性質の違いは次の例文からも分かる。(50)において、事件の原因が「奥野が突然発狂したこと」にあることを言う場合、「ニチガイナイ」はそのままの形で使えるが、「カモシレナイ」は「の」のスコープに入れなければならない。(50b)が成り立つのは、事件が起きた原因を推測する文脈ではなく、事件発生直後に奥野がどうなったのかを推測する文脈である。

- (50) (事件の原因を推測する文脈で)

- a. 事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂したにちがいないと思ひもした。(大塚公子『死刑囚の最後の瞬間』)
- b. #事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂したカモシレナイと思ひもした。
- c. 事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂したノカモシレナイと思ひもした。

(50a) (50c)は、次の文の括弧内の言葉が省略されてできたものであると考えられる。このような違いからも、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の異質性が証明される。

- (51) a. 事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂した(ために事件が起きた)ニチガイナイと思ひもした。
b. 事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂した(ために事件が起きた)ノカモシレナイと思ひもした。

以上のように、「事態の蓋然性」と「判断の蓋然性」は異なる概念を表す。このような区別をすることにより、蓋然性を表す各形式には主観性の点で違いのあることが明らかとなった。

参考文献

- 安達太郎 (1997) 「副詞が文末形式に与える影響」『広島女子大学国際文化学部紀要』新輯3 pp. 1-11
- 大鹿薫久 (1992) 「「かもしれない」と「にちがいない」 叙法的意味の一端」『ことばとことのは』9 いずみ書院 pp.127-134
- (1993) 「推量と「かもしれない」「にちがいない」 叙法の体系化をめざして」『ことばとことのは』10 いずみ書院 pp. 96-104
- 澤田治美 (1978) 「日英語文副詞類(Sentence Adverbials)の対照言語学的研究 Speech act 理論の視点から」『言語研究』74 日本言語学会 pp. 1-34
- 杉村 泰 (1997) 「副詞「キット」と「カナラズ」のモダリティ階層 タブン/タイテイとの並行性」『世界の日本語教育』7 国際交流基金 pp. 233-249
- (1999) 「事態の蓋然性と判断の蓋然性」『ことばの科学』12 名古屋大学言語文化部言語文化研究会 pp. 171-187
- (2001a) 「カモシレナイとニチガイナイの異質性」『言葉と文化』2 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 pp.79-93
- (2001b) 「推論の型と推論の根拠の関連について ニチガイナイとヨウダ、ラシイの違い」、『ことばの科学』14 名古屋大学言語文化部言語文化研究会 pp. 23-39
- (2003) 「続・カモシレナイとニチガイナイの異質性 コーパス調査の結果から」『言葉と文化』4 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 pp. 261-276

- 高橋太郎 (1985) 『国立国語研究所報告82 現代日本語動詞のアスペクトとテンス』
秀英出版
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5 明治書院 pp. 37-48
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」 仁田義雄・益岡
隆志(編)『日本語のモダリティ』くろしお出版 pp. 1-56
- (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- (1999) 「モダリティを求めて」『月刊言語』28-6 大修館書店 pp.34-44
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 三原健一 (1995) 「概言のムード表現と連体修飾語」仁田義雄(編)『複文の研究』
pp. 285-307 くろしお出版
- 宮崎和人 (1991) 「判断のモダリティをめぐって」『新居浜高等専門学校紀要人
文学部編』27 新居浜高等専門学校 pp. 35-53
- 三宅知宏 (1995) 「「推量」について」『國語學』183 国語学会 pp.86-76(左1-11)
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語
のモダリティ』くろしお出版 pp. 57-74
- (1992) 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101 日本言
語学会 pp. 64-83